読みを深める国語教育

～３・４年複式学級での実践を通して～

川端　大奨

本研究は，子どもたちに付けたい力として「場面の移り変わりから登場人物の心情の変化を読む」ことに重点を置いた。場面の移り変わりから登場人物の心情を読むことは，文学教材を学習する上で非常に大切になってくると言える。そのために読み取りの手立てとして心情曲線を用いて読み取りを行い，それらをポスターで紹介するという活動を設定した。

これらの活動を通して場面の移り変わりを読み取り読みを深めていくことをめざした。その結果成果としては主体的に学習に取り組む様子が見られた。紹介するという他者意識が子どもたちの中に芽生え，どうすればこの作品の良さが伝わるかを考え学習を進めていくことができた。しかし課題としては，学習課題がゴールになってしまった。学習課題の設定の吟味が必要である。また子どもたちの中での目標は場面の移り変わりから登場人物の心情を読むということにもっと意識させるための手立ても必要であった。そうしたことを踏まえて今後さらなる授業研究が求められる。

キーワード：心情曲線，ポスター，読みを深める，複式

１．研究目的

本単元において子どもたちに付けたい力として「場面の移り変わりから登場人物の心情の変化を読む」ことに重点を置いた。これまでに心情を読み取る学習は進めてきているが,場面の移り変わりが心情に影響していると言える。しかし場面の移り変わりから登場人物の心情を読むことは書かれていない隠された意味を理解することや書かれている文章から考察していくことがあり，読解力が乏しいと難しいと感じている。

以上のことを踏まえて子どもたちがなるほどと思える必要があると感じ，それらの課題と設定し，解決するために本研究を進めることにした。

２．研究方法

２．１　単元の設定

場面の移り変わりがあり、登場人物の心情の変化を読み取りやすい「ごんぎつね」と「三年とうげ」を単元として扱うことにした。

２．２　探求力

本実践では探究力を「視点をもって文章を読むことで読みを深め自分と友だちとの考え方の違いに気づく力（読解力）４年生」と「視点をもって文章を読むで，読みを深める力（読解力）３年生」と設定した。まず４年生３年生ともに場面の移り変わりを捉えながら党人物の心情の変化を想像しながら読むことを目指したい。しかし，ただ物語を読むだけではその力はつかない。そこで物語を読み子どもたちが自ら読みたくなるように学習課題を設定した。学習課題があることで，子どもたちはその課題に向かう中で読みを深めていくことができるのではないかと考えた。

２．３　読みの視点

視点とは物語を読んでいくうえで大切になってくると考えているものである。まず会話・行動・場面の様子の３つの視点をもとに読みを進めていく。しかしこの３つの視点はバラバラに働かせるのではなく，主たる登場人物にスポットを当ててこの３つの視点を理解していくことで登場人物の心情の変化を捉えられるのではないかと考えている。この心情理解を可視化していくことでより子どもたちは心情の変化をとらえやすいのではないかと考えている。

２．４　省察性

次に本実践では，省察性を「視点をもって読み心情曲線に表すことで，ズレが出てきたときにテキストを再度見返すこと（読解力を支える省察性）」と「グループで心情曲線について話し合いそれを掲示することでほかのグループとの違いに気づきテキストを見直すこと（読解力を支える省察性）」に設定した。

２．５　授業の手立て

本実践における探究的な学びを支えるしかけとして，心情曲線を用いたポスターセッションを学習課題として設定した。心情曲線とは物語の登場人物の心情を表すものであり，曲線に表すことによってその時の心情を理解するには適切だと考えている。

紹介の方法は，心情曲線を用いたポスターセッショ

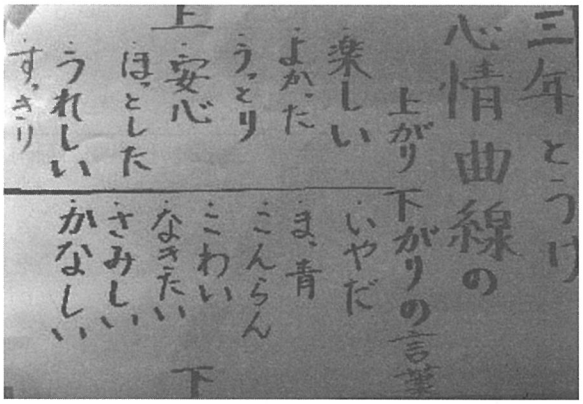
ンである。ポスターセッションは，心情曲線に登場人物のその時の気持ちを書き込み，物語としてはどの部分が一番の見どころかを考えて紹介するというものである。また心情曲線を書く時には登場人物の一人に絞って書くように促していった。

２．５．１　心情曲線

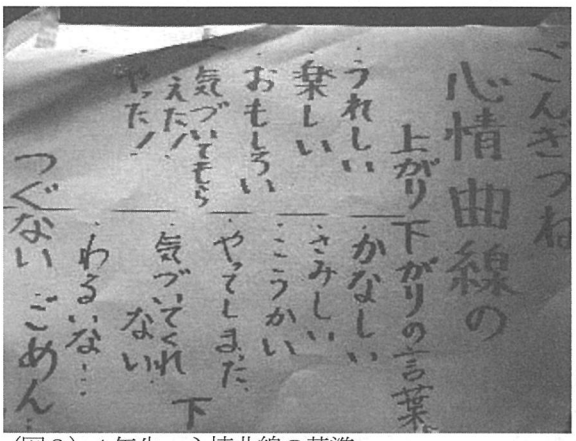
今までの物語の単元では登場人物の心情を読むことを学習として進めてきている。場面の移り変わりから登場人物の心情を理解するために本単元では心情曲線を活用して話し合いを進めていく活動を行う。心情曲線は，折れ曲がるところが登場人物の心情の変化するポイントであり，なぜそこで心情曲線が変わったのかを探ることで読みが深まると考えている。心情曲線の上がり下がりの基準は学習計画をしていく段階でそれぞれ決めた。3 年生は上がる基準は【たのしい・うっとり・おもしろい・ほっとしている・よかった・あんしん】で，下がる基準は【かなしい・こわい・いやだ・さみしい・なきたい・こんらん・真っ青】（図１）である。

4 年生での上がる基準は【おもしろい・たのしい・つぐない・きづいてもらえた・うれしい等】で，下がる基準は【こうかい・やってしまった・かなしい・きづいてもらえない・くやしい等】である。4 年生の上がる基準の内容に関してはおもしろいやたのしいときづいてもらえた，つぐない，うれしいとは感情の差異はある。しかし心情曲線の特性上，同様に上がる基準としている。（図２）

また心情曲線は一人一人に違いが出やすいものである。その一人一人の読みの違いを活かして話し合い活動を深めたいと考えている。



（図１）３年生　心情曲線の基準

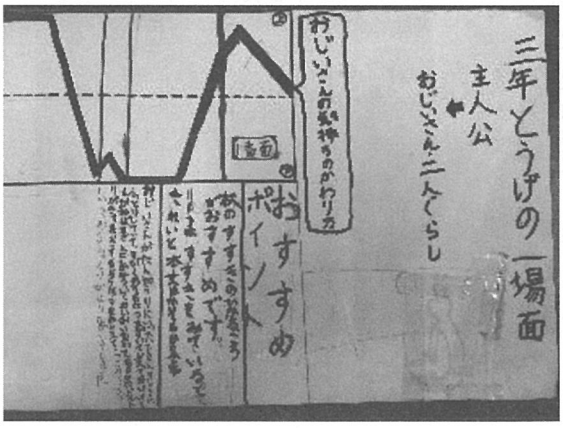


（図２）４年生　心情曲線の基準

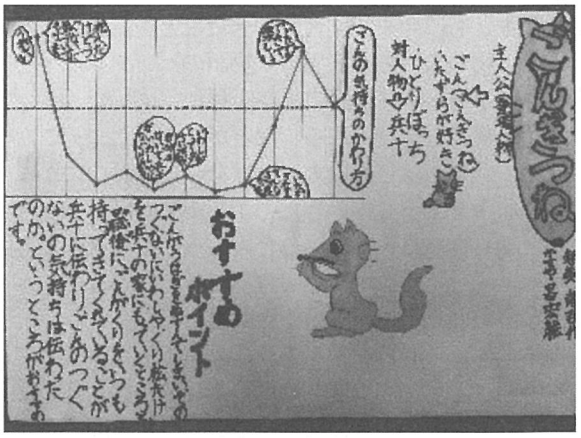
２．５．２ポスターで紹介

ポスターでほかのクラスを対象に３年生は民話，４年生は新見南吉作品ときつねが出てくる作品を紹介した。ポスターには，登場人物の心情曲線とおすすめポイントを書く活動を行う。そのポスターを用いて紹介する活動を取り入れている。（図３）

三次では，自分の好きな本で紹介ポスターを作成する。自分で選んだ本も心情曲線を用いたポスターであり，それらを活用し多読につなげていきたいと考えた。



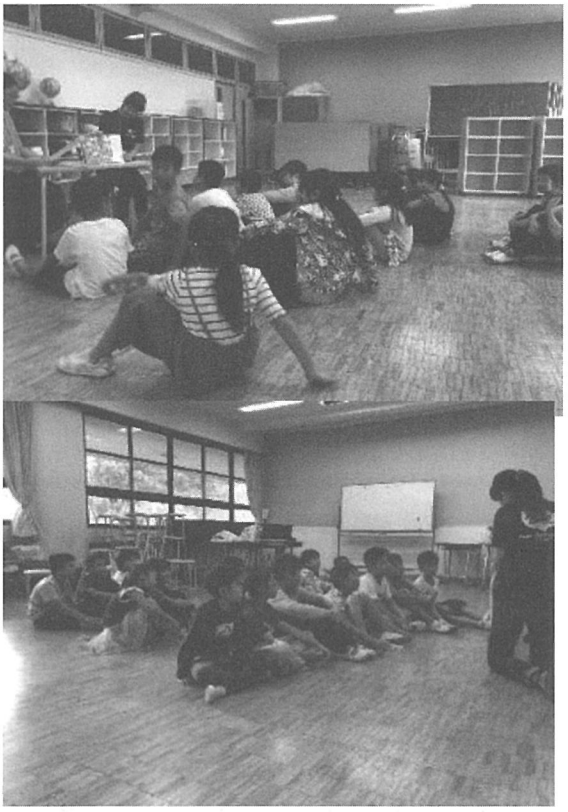
（図３）３年生　ポスターで紹介



（図３）４年生　ポスターで紹介

３．授業の実際

本校では保護者の方の読み聞かせボランティアがある。単元に入る前に「三年とうげ」と「ごんぎつね」の読み聞かせを行っていただいた。その読み聞かせが子どもたちと作品との出会いである。読み聞かせは役割に分けて読んでくださり，子どもたちにとって作品に引き込まれるものとなった。３年生４年生ともにお互いの作品を聞き表現の良さや気持ちのことに触れるいい機会になった。（図４）



（図４）保護者ボランティアによる読み聞か

本単元では学習計画を立てることから始めた。３年生４年生ともに今まで学習してきたことを話し合った。「登場人物の気持ちを考える」「物語のパンフレットを作り紹介する」や「場面の移り変わり」「場面・会話・行動から気持ちを読み取る」などが出てきた。そこから今回の勉強ではどんな力をつけないといけないかまたどんな事を学習していきたいかを１時間かけてしっかりと話し合った。その話し合いの後に振り返りとして不思議に思ったことや話し合ってみたいことここが気になるといったことを書く活動を行った。

物語全体から心情曲線を書く活動を行った。書いている中で子どもたちは疑問に思ったことや話し合いたいことをつぶやくようになりそこから自然と問いが生回は心情曲線を書く活動と話し合う活動を分けて単元計画を行った。それは話し合いにできるだけ時間を取り深めていきたいと考えたからである。しかしながら個人思考の中で子どもたちは，周りの心情曲線が気なっている様子であった。つぶやきながら個人思考を進めていた。

４年生はごんがいたずらをしているときの気持ちの話し合いを前時で行っている。ごんのいたずらは実はさみしいからだという意見が出てきた。ごんは子ぎつねではなく，小ぎつねであることに注目した子どもがおり，きつねはある程度大人になると一人立ちをする習慣があり，ごんはそのくらいの時期だと自主学習で調べて考察していた。そこからひとりぼっちの小ぎつねという叙述に注目して，仲間が欲しい，さみしい，気を引きたい，一緒に遊びたいといった意見が出てきた。またごんがいたずらをすることは，かまってほしいけどやり方が分からないからいたずらばかりになっているといった意見も出てきた。

話し合いを重ねる中で子どもたちからは，「ごんは兵十に償いをしている。けれど神様のしわざにされてもなぜ次の日も償いをしたのかな？」という意見が出てきた。本時ではその部分を中心に話し合いたい。また心情曲線については下に下がれば下がるほどごんは人の心を取り戻していくのではといった意見も出てきている。

３．１　単元計画

単元計画は以下のように設定し，学習を進めていった。

	学習活動　３年生（全８時間） 本時3/8	学習活動　４年生　（全９時間） 本時4/9
１次	学習計画を立てる（１時間） ・みんなで話し合いたいことや不思議に思ったことを考えそこから学習計画を立てていく。	学習計画を立てる　（１時間） ・みんなで話し合いたいことや不思議に思ったことを考えそこから学習計画を立てていく。
２次	登場人物（おじいさん）の心情を読む（５時間） ・おじいさんに焦点を当て，全体から心情曲線を書いていく。（個人学習） ・おじいさんの心情曲線を話し合う。おじいさんがとうげで転ぶ前と後で心情にど	登場人物（ごん）の心情を読む（６時間） ・ごんに焦点を当て，それぞれの場面のごんの心情曲線を書いていく。（個人学習） ・ごんがいたずらしているときの気持ちを心情曲線をもとに話し合う。前時の個人学習をもとに話し合っていく。

	んな変化があるのかを話し合う。場面の変化と共におじいさんの気持ちに変化があることを捉える。（本時） ・トルトリの人物像について話し合う。トルトリの人物像は起承転結の転の部分でありおじいさんの心境の変化を考える上で大切である ・「三年とうげ」で心情曲線を用いたポスターを作成する。（個人で一つ作成） ・ポスターセッションを行い物語の紹介を行う。	・ごんが兵十に罪の意識を覚え，償いをしていく気持ちを心情曲線をもとに話し合う。ごんの償いの気持ちはなかなか伝わらないことやそれでも償い続けるごんの気持ちに迫りたい。（本時） ・ごんのきもちは兵十に伝わったのかを心情曲線をもとに話し合っていく。ごんの行為はつたわったが気持ちまでは伝わらないことのもどかしさや辛さに迫りたい。 ・「ごんぎつね」で心情曲線を用いたポスターを作成する。（個人で一つ作成） ・ポスターセッションを行い物語の紹介を行う
3次	民話の中から自分が選んだ本でポスターを作成する。（2時間） ・選んだ本の登場人物（主人公）に焦点を当て心情曲線を書く。それを活用してポスター制作する。 ・それぞれのポスターを掲示し，紹介していく。	新見南吉作品ときつね関連作品の中から自分が選んだ本でポスターを作成する。（2時間） ・選んだ本の登場人物（主人公）に焦点を当て心情曲線を書く。それを活用してポスター制作する。 ・それぞれのポスターを掲示し，紹介していく。

4．授業の考察

本実践において探力を支えるしかけとして心情曲線とポスターで紹介する活動を取り入れた。心情曲線は登場人物の心情を読み取るのに適していたと言える。心情曲線から細かな変化を話し合うことでより学びを深めることができると言える。また登場人物の深奥を可視化することで子どもたちにとっては心情を捉えやすく見やすいものである。また個々での読みのズレが表れやすく話し合いを深めることが容易であると言える。

ポスターで紹介することに関しては，子どもたちは他の人に見られることに対して意欲的になり読み取りや話し合いにそうした場面が見られた。そうした部分からも主体的に取り組むために効果的だったと言える。

5．成果と課題

本実践において成果は学習課題を明確に設定し，見通しを持たせることで学習意欲が向上することが分かった。またその過程で学習計画を子どもたちと考え，学習課題に合うものにしていくことでより学習に向かうことができたと言える。

課題としては学習の焦点化を図ることが難しいと考えている。子どもたちだけで学習を進めていく複式教育では、教師が関わる時間が短いために学びを深めることが難しい。さらに学びを深めるためにもっとより具体的な発問やすぐに考えて始めることができるしかけを準備しておくことが求められる。
今後もさらにそうした部分を追究していきたいと考えている。

6. 参考文献

平成29年度　小学校新学習指導要領の展開　国語編
2017　水戸部修治　吉田裕久　明治図書

和歌山大学教育学部附属小学校紀要　第40集
2017　和歌山大学教育学部附属小学校

国語力向上モデル事業2年次研究のまとめ
2009　和歌山大学教育学部附属小学校

小学校学習指導要領解説　国語編
2017　文部科学省

複式教育の実践
2003　和歌山大学教育学部附属小学校

主体的に学ぶ力を高める単元構想の在り方

矢出　大介

私のこれまでの総合的な学習の時間（※以下総合とする）の実践では，子どもが課題に向かって探究し，その学びの過程において，出合い，体験を大切に行ってきた。その中で，子どもの意欲は高まっていることを実感できたが，子どもがどのようなキーコンピテンシーを身に付けているのかが不明確であった。昨年度は，公益財団法人日立財団と連携して，資質・能力の育成，発揮するトレーニングプログラム，それを応用した探究的な学びを通してキーコンピテンシーを高めることができたかどうかを検証し，自律的に行動する能力が高まったことが分かった。しかし，学びに向かう力の高まりがあまり見られなかった。そこで，今年度はキーコンピテンシーの中でも主体的な学びを高める単元構想の在り方を検証する。

キーワード：主体的な学び，キーコンピテンシー，資質・能力，映像制作

１．研究目的

新学習指導要領では，外国語活動が外国語となり，移行期間中に限り，15時間までなら総合を外国語に使ってよいことになった。前回の改訂においても小学校の総合の時間が105～110時間から70時間に削減された。各教科の授業での言語活動を総合とつなげ，探究的な学びを通して主体的に学ぶ力を高めることが期待されていた。しかし，本県の総合の時間では，この力の高まりを教員も子どもも実感できていないことが現状である。そこで，今回の研究において，主体的に学ぶ力を高める単元構想の在り方について明らかにし，本県の教員に広めていく。

１．１．研究仮説

探究と伝え合う活動を３度行い，最後に自分たちの学びの成果物として映像作品の完成を目指す単元を実践する。友だちと１つの目標を目指して繰り返し，学びなおすことで主体的に学ぶ力を高めることができると仮定した。

１．２．単元構想

全５５時間　和歌山城PRプロジェクト

つかむ	地域のことを調べて，伝えたいことを考える		時間 ②
	自分たちで映像を撮影する		④
探究	撮影のプロや劇団員と出会い，どのように映像制作をしていくのか考える		⑨
まとめる 伝え合う	撮影のプロや劇団員から学んだことを活かして１人ずつ自分の伝えたいことを短い時間の映像作品にする		②
	それぞれの映像作品について話し合いながら，５分間の映像作品に必要な場所や内容について話し合う。		②
探究	和歌山城学芸員さん・忍者・動物園・天守茶屋の方々に来て話を和歌山城の魅力を聞く。		④
	劇団Ｚさん・映画監督Ｋ先生と一緒に台本を制作する。		②
まとめる 伝え合う	取材活動・現地調査をしながら撮影をしていく①	話し合って映像を５分にまとめていく①	⑮
探究	取材活動・現地調査を行う		④
まとめる 伝え合う	取材活動・現地調査をしながら撮影をしていく②	話し合って映像を５分にまとめていく②	⑤
いかす 振り返る	完成した映像作品をより多くの人に見てもらえるようにどうすれば良いか話し合い，活動する		④
	１年間の活動を振り返る		②

映像制作をすることを単元に位置付けた理由は，自分たちの学んだことが映像として表現することができ，映像があるためそれぞれの考えを容易に共有しながら話し合うことができるからである。子どもたちは，友だちと考えを共有しながら何度も学び直しをすることができることで，学びの深まりを実感していく。つまり，主体的に学ぶ力を高めることができると考えた。

子どもたちの意欲を持続・高めるためのしかけとして，多くの人との出会いを単元に位置付けた。その中でも，劇団Ｚさんと映画監督のＫ先生に子どもたちの学びの伴走者となって，話し合いや学び直しにおいて考えを深めるために必要な体験や知識を与えてくれるように伝えた。これにより限られた時間で，教え込まれて学ぶのではなく主体的に学び，目標を達成できると考えた。